

よさの미래会議 提案書

私たちが考えるまちのありたい姿

令和8年1月

< 目 次 >

1 はじめに.....	1
2 よさのみらい会議の概要	2
(1) 開催趣旨.....	2
(2) 開催概要.....	2
(3) 分科会集合写真	6
3 議論から見た与謝野町の「強み」と「課題」	7
4 よさのみらい会議 各分科会からの提案.....	9
(1) しごとづくり分科会からの提案	11
(2) 暮らしづくり分科会からの提案	21
(3) ひとづくり分科会からの提案.....	29
5 中高生よさのみらい会議からの提案.....	36
(1) 中高生よさのみらい会議 A 班からの提案.....	38
(2) 中高生よさのみらい会議 B 班からの提案.....	42
6 参加者アンケート	46

1 はじめに

私たちよさのみらい会議参加者は、「第3次与謝野町総合計画」の策定に当たり10年後のまちの将来像を考えるために集まりました。

私たちが向き合ったのは、町が直面している問題です。若者が就きたい仕事が多くなく町を出て行ってしまうこと、人口が減ってお年寄りの割合が増えていること、そして町の多くの施設が古くなって、修繕を進めたり、あり方そのものを見直さなければならなくなっていることです。このまま何もしないでいると、私たちの大好きな与謝野町がだんだん暮らしにくくなってしまいかもしれません。そんな現実や今後の見通し、不安な気持ちを、みんなで率直に話し合って共有するところから、この会議は始まりました。

無作為に選ばれ、世代も立場も異なる私たちが、「しごとづくり」「くらしづくり」「ひとづくり」の3つのテーマに分かれ、この厳しい現状をどう乗り越え、10年後にどのようなまちを次世代に引き継ぎたいのか、真剣に語り合ってきました。

庁舎をはじめ公共施設のあり方、公共交通や空き家、仕事の種類や質、地場産業の未来、子育て環境、世代や立場を超えた交流の必要性や、多様な人々が共に生きる社会の姿、デジタルとの向き合い方まで、それぞれの視点から「自分ごと」として考え抜きました。

議論を通じて私たちが共有したのは、「どうせ誰かがやってくれる」という他人ごとではなく、「まず自分たちが動こう」という思いです。人口が減り、財政が厳しさを増す未来において、私たちの暮らしは、もはや行政サービスだけで成り立つものではありません。地域に住む私たち一人ひとりの主体的な行動と、お互いの状況を理解し「寄り添う」ことによって、新たな「共助」の仕組みを再構築していくことが必要です。

「このままでいいのだろうか」という漠然とした不安は、この会議を経て、「こうすれば良くなるのではないか」という具体的な提案に変わりました。

私たちが目指す10年後にありたいまちの姿は、単に行政機能が維持されているまちではありません。それは、世代や立場、障がいの有無や国籍を超え、誰もが「オープン」に参加し、安心して自分らしく暮らせる、居心地の良いまちです。

この提案書は、その未来に向けた私たちの「はじめの一步」です。この提案が、「第3次与謝野町総合計画」に活かされるとともに、未来の与謝野町をともに創る力となることを信じています。

よさのみらい会議 参加者一同

2 よさのみらい会議の概要

(1) 開催趣旨

与謝野町では、令和 9 年度から令和 16 年度までを計画期間とする「第 3 次与謝野町総合計画」の策定が進められています。

この「よさのみらい会議」は、総合計画策定に当たり、無作為抽出により選ばれた住民が、町の現状と未来の姿を共有し、「自分ごと」として議論するために開催されました。

(2) 開催概要

「10 年後のまちの『しごとづくり』『くらしづくり』『ひとづくり』」を全体テーマとし、以下の 3 つの分科会に分かれて議論を行いました。

- しごとづくり分科会
- くらしづくり分科会
- ひとづくり分科会

よさのみらい会議参加者

- 無作為に抽出し会議の案内を送付した数：5,000 人
- 応募した方の数（応募率）：70 人（1.4%）
- 参加した方の人数：43 人

中高生よさのみらい会議参加者

- 参加した中高生の数：19 人
- 参加生徒の在籍校：与謝野町立加悦中学校、与謝野町立江陽中学校、与謝野町宮津市中学校組合立橋立中学校、学校法人共栄学園京都共栄高等学校、学校法人成美学園福知山成美高等学校、聖ヨゼフ学園京都暁星高等学校

参加者名簿 ※五十音順、氏名の公表を希望しない人は除く

I. S	今井裕樹	今田昭夫	芋田広子	近江裕之
太田瑞樹	尾関将維	小谷久美子	川邊真	木上多恵
黒田和美	河野美柚	坂根賢	下村陶子	杉本直哉
苗田秀一	藤原圭太	細井由彦	柊瑞歩	向仲のりみ
山下哲八	山添光芳	山本龍太郎	横谷秀樹	

開催日程（各回の議事次第）

● 第1回（9月14日）

- 会議の趣旨、町の現状（総合計画、人口推移等）、各テーマの説明
- 自分ごと化会議の意義・概要説明
- グループワーク（自己紹介、目指すべき未来像、地域の強み・課題の共有）

● 中高生よさのみらい会議（10月12日）

- 会議の趣旨、町の現状説明
- 自分ごと化会議の意義・概要説明
- グループワーク（自己紹介、10年後にありたいまちの姿）

● 第2回（10月13日）

- 前回の振り返り
- ナビゲーター講演「デジタル×地方創生」
（伊藤 伸 氏：構想日本総括ディレクター、デジタル庁参与）
- テーマにおける町の現状説明
- グループワーク（日常生活で感じる課題、課題解決に向けてできること）

● 第3回（11月9日）

- これまでの議論の振り返り
- グループワーク（課題解決策の議論、目指すべき未来像に向けた取組み）

● 第4回（12月7日）

- 提案書素案の説明
- グループワーク（提案書素案の意見交換）
- 4回の議論の振り返り、会議全体の総括

<コーディネーター>

- よさのみらい会議

一般社団法人構想日本

- ・ 小瀬村寿美子
- ・ 大澄憲雄
- ・ 坂本健太

- 中高生よさのみらい会議

一般社団法人構想日本

- ・ 伊藤伸
- ・ 小瀬村寿美子

<ナビゲーター>

- ・ 伊藤伸（一般社団法人構想日本総括ディレクター、デジタル庁参与）

<補助スタッフ>

- ・ 野村要介（一般社団法人構想日本）

<与謝野町>

- ・ 与謝野町企画財政課
- ・ 与謝野町総合計画策定ワーキングチーム

(3) 分科会集合写真

しごとづくり分科会



くらしづくり分科会



ひとづくり分科会



3 議論から見た与謝野町の「強み」と「課題」

私たち住民の視点から「10年後のまちの『しごとづくり』『くらしづくり』『ひとづくり』」を考えた時、町の「強み」と「課題」が浮き彫りになりました。

以下に、私たちが考えるまちの姿を整理します。

(1) まちの良いところや今後も生かしていきたいところ（強み）

① 受け継がれてきた歴史・文化と産業

- 「丹後ちりめん」に代表される織物業の高度な技術と、ちりめん街道などの歴史的景観が今なお息づいている。
- ちりめん街道や日本三景・天橋立を望む一字観公園など、周辺地域を含めた強力な観光資源を有している。
- 幼少の頃から地域の特産品である丹後ちりめんに触れる機会がある。

② 豊かな自然と食の恵み

- 四季折々の表情を見せる田園風景や、大江山や野田川をはじめとする豊かな自然環境が保全されている。
- 新鮮な野菜や米など、地域で生産される食材の品質は高く、豊かな食文化が根付いている。
- 都市部住民にとっても魅力的な農業体験や交流のコンテンツが存在する。

③ 人の繋がりや深さと共助の精神

- 顔見知りが多く、互いの状況を把握しやすい環境があり、防犯や防災面での安心感につながっている。
- 困った時には互いに助け合う「共助」の精神が、地域の中に自然な形で残っている。

(2) 今のまちに足りないところや改善したいところ（弱み・課題）

① 産業・雇用の停滞と魅力不足

- 若者が希望する多様な職種や「リモートワーク」等の柔軟な働き方ができる企業が少ない。都市部と比較して賃金が低く、休日が少ないなど労働条件が不利な傾向にある。
- 町内にどのような企業があるか認知度が低く、企業の魅力や求人情報が住民や若者に届いていない。大手就職サイトへの掲載も少なく、PR不足が顕著である。
- 出る杭は打たれる風潮や、トップダウン的な経営が根強く、若者や新しい挑戦を受け入れる土壌が不足している。

- 丹後ちりめんは「高価」、「着る機会がない」と敬遠され、農業も高齢化により後継者が不足している。

② 生活インフラと公共施設の課題

- 公共交通（バス・鉄道など）の稼働が少なく、自家用車がなければ通勤・通学、買い物に困難である。免許返納後の高齢者の生活維持に不安がある。
- スーパーの撤退による「買い物弱者」の発生に加え、中高生や若者が気軽に集まれる商業施設（カフェ、娯楽施設等）や学習スペースが不足している。
- 庁舎が3箇所に分散しており、一か所で手続きを完結できず、移動の負担が生じている。また、既存の公共施設（公民館等）の利用方法が分かりにくい。
- 管理不全の空き家が増加し、景観の悪化や防犯上の懸念材料となっているが、所有権の問題等で解決が進んでいない。

③ 協調性を重んじる風土、居場所の不足、多様性に対する理解の遅れ

- 周囲との調和を求められる傾向にあるため、本音で相談したり新しいことを始めたりしにくい雰囲気がある。
- 職場や学校以外で、世代や立場を超えて安心して自由に過ごせる居場所がない。
- 多様な背景を持つ人々との接点が少ないため、理解が進んでおらず、心理的な距離が存在する。

④ 情報発信とデジタル化の遅れ

- 行政や地域の情報（イベント、制度、ゴミ分別等）が、必要な人にタイムリーに届いておらず、ホームページ等も見づらい。
- デジタル機器の操作に不慣れな人へのサポート体制が不十分であり、行政手続きのオンライン化等の恩恵を享受できていない。

⑤ 降雪・積雪による影響

- 与謝野町は寒暖差が激しく、特に冬場の降雪・積雪や凍結により、生活・経済活動に大きな影響を与えている。1月・2月はイベント等ができず、経済活動や地域活動が停滞してしまう。除雪は自己責任の部分が多く、負担が大きい。

4 よさのみらい会議 各分科会からの提案

全4回のよさのみらい会議と1回の中高生よさのみらい会議を通じて、私たちはまちの現状と課題を「自分ごと」として捉え、未来を見据えた議論を深めてきました。

第1回では、まちの現状を把握し、漠然と感じていた課題を共有しました。第2回では、ナビゲーターの伊藤伸氏から「デジタル×地方創生」をテーマに、デジタル化に関する先進事例を紹介していただき、新たな時代の流れを学びました。第3回では、これまでの議論を基に、住民として何をすべきか、行政に何を求めるかを具体的に議論しました。第4回では、中高生よさのみらい会議を含めたこれまでの議論を集約し、各分科会から10年後の「ありたい姿」に向けた提案を、住民の声とともに次項のとおり整理しました。

私たちが提案する未来の姿は、まちの「強み」を最大限に活かし、「課題」を住民と行政が一体となって克服していく姿です。



▲ナビゲーター講演の様子

しごとづくり分科会からの提案

- ① 「与謝野町に魅力的な仕事はないだろう」は思い込み？ 魅力を見える化して、みんなで共有しよう
- ② 「ここで働きたい！」と思われる会社へ。柔軟な労働環境、ホワイトで自由な職場づくり
- ③ ちりめんは「着物」だけじゃない！ 伝統×新アイデアで、稼げる地場産業へ
- ④ 「出る杭」は打たずに伸ばす！ 挑戦する人を全力で応援・サポートするまちに
- ⑤ 「ここで働き暮らしたい！」と若者に選ばれるまちへ

くらしづくり分科会からの提案

- ① 「役場に行かなくても OK？」 地域の拠点で、もっと身近で便利な行政へ
- ② 車がなくても大丈夫！ 最新技術と「お互いさま」の助け合いで安心して暮らし続けられるまちに
- ③ 空き家は「困った」じゃなくて「宝」かも？ 情報の「見える化」でチャンスに変えよう
- ④ 次世代が定着し、健やかに育つ魅力あるまちへ！ 若者・子どものための環境づくり
- ⑤ 「困った時はお互いさま！」日々のくらしの困りごとを共助で支え合おう

ひとづくり分科会からの提案

- ① 「思ったことをちゃんとと言える」寄り添いの心を育むまちへ
- ② 「当事者の声」を聞きたい。リアルな体験で、心のバリアフリーを実現しよう
- ③ 「用事がなくても、行っていい？」誰もがふらっと立ち寄れる「たまり場」をつくろう
- ④ 「先生はなんと小学生！？」みんなの得意がつながるコミュニティ
- ⑤ 「私にもできること、きっとある！」 全員活躍のまちづくり

(1) しごとづくり分科会からの提案

しごとづくり分科会では、第1回・第2回で「働く場所がない」、「都市部と比較して労働条件が不利な傾向にある」、「情報発信が不足している」、「トップダウン的な経営が根強い」といった現状の課題や、「地場産業の未来への危機感」を共有し、課題の背景にある要因について、みんなで議論しました。第3回では、これらの要因への対策について自分ができること、地域ができること、行政の役割として住民が期待することの観点からそれぞれの考えを共有しました。

私たちは、10年後の与謝野町が、若い人が「ここで働きたい」と思えるまち、地場産業である織物業など、地域の魅力を活かした仕事を通じて豊かな生活を送ることができるまちを目指します。「どうせ良い仕事はない」という思い込みを払拭し、住民と企業、行政が一体となって「情報」と「意識」の壁を壊す必要があります。地場産業の魅力を「時代に合った形」で再創出し、創業などの新たな挑戦を地域全体で応援する風土を育んでいくことを提案します。



▲しごとづくり分科会の様子

提案①	「与謝野町に魅力的な仕事はないだろう」は思い込み？ 魅力を見える化して、みんなで共有しよう
------------	--

若者の町外転出の背景には、「与謝野町に魅力的な仕事はないだろう」という根強い思い込みが存在します。確かに都心部と比較して仕事の「種類や幅が限定的」ではありますが、最大の課題は若者や住民に情報が届いていないという「情報発信」です。思い込みを払拭し、与謝野町で働いている人たちが自分の仕事を魅力的に感じられるようにするため、商工会が行っている企業紹介に加え、事業内容や場所を「企業マップ」などで分かりやすく「見える化」し、住民同士が地域内の企業に関する情報を共有しあうことを提案します。

10年後にありたいまちの姿
● 多様な仕事の選択肢が認知され、若者が希望を持って働けるまち ● 地域の企業の強みやオンリーワンの魅力が、住民や町外の人々に深く理解されているまち ● 情報の「発信」と「受信」がスムーズで、隠れた名店や企業の魅力が皆に共有されるまち

参加者から出た意見	
個人の役割	● 地域の企業や職業に関心を持ち、知らない企業を知る努力をする。 ● SNSなどで町の情報発信をしたり、地域の企業の情報発信に「いいね」を押す。 ● 与謝野町で当たり前になっていることを、町外に出たときに比較して興味を持ってみる。 ● 家族と地元の仕事やイベントについて話す
地域の役割	● 町内の企業情報を共有し、にイベントなどで町の企業と地域がお互い声を掛け合う。 ● 商工会が地域の企業の情報発信を強化する。 ● 新しい店ができたなどの情報を共有する。 ● 地域のイベントに、町の企業が出展する場を設ける。
行政の役割として住民が期待すること	● 企業の事業内容や特性を広報などで広く知らせる。 ● 学生や若者に向けて企業マップを作成するなど、興味を引きやすい方法で情報を提供するよう、商工会に作成を依頼する。 ● 企業の事業や採用計画を広報紙の裏面等で積極的に周知する。 ● ホームページの設計を見直し、必要な情報（企業の魅力等）にたどり着きやすくする ● 近隣地域の大学と連携して、町の外からの目線で町のPR動画などの広告を作成してもらう。

バス等の公共交通に地元企業の広告
(スポンサー) を掲載し、認知度を
高めてはどうか。



「ひらく織」という、織物の魅力を発信す
るページが町ホームページに掲載されてい
るが、そもそもホームページの作りが複雑
でそのページにたどり着けない。

公式 LINE も使っているが、デジタルだと
情報があっても目に留まらずに流れてしま
うことが多い。紙の媒体も織り交ぜ、「届
く」情報発信が重要ではないか。



提案②	「ここで働きたい！」と思われる会社へ。柔軟な労働環境、ホワイトで自由な職場づくり
------------	---

賃金や休日といった労働条件が都市部と比較して不利であることに加え、地域の企業の中にはトップダウン的な経営体質が強い企業や、働き方改革が遅れている企業が多いため、若者が町外に流出しているという声が上がりました。この状況を改善し、若者が定着するためには、行政が商工会に促して、経営者の意識変革のためのスキルアップ講習会を実施することや、労働組合の結成も視野に入れた働く側からの待遇改善へのアプローチを行うこと、リモートワークなど柔軟な働き方を可能にする通信環境の整備を行うことを提案します。

10年後にありたいまちの姿
● 都市部に引けを取らない賃金や休日が確保され、豊かな生活が送れるまち。 ● リモートワークや柔軟な働き方が当たり前を選択でき、ワークライフバランスが充実しているまち。 ● 経営者と従業員が対等に話し合え、働きがいと誇りを持って仕事に取り組めるまち。

参加者から出た意見	
個人の役割	● 労働組合に加入し、待遇改善に向けて交渉する。 ● スマート家電などを活用し、家事の効率化とワークライフバランスを確保する。 ● 自分に合った働き方を模索し、環境が悪い職場からは離れる選択肢を持つ。 ● モバイルルーターを持つなど、個人の通信環境を整える。
地域の役割	● 企業間で連携（共同バス等）し、通勤の足や交通課題を解決する。 ● 零細企業同士が共同・連携することで利益率を高め、待遇改善に充てる。
行政の役割として住民が期待すること	● リモートワーク企業の受け入れができる環境を整備する。 ● 商工会に促して、経営者の意識変革のためのスキルアップ講習会を開催する。 ● ハローワークや労働基準監督署と情報共有を行い、適切な相談や支援につなげる。 ● 働きやすい環境づくりのための相談部署や専門家を配置する。 ● 労働環境改善のための助成を加速させていく。



10年後にありたいまちの姿を考えたときに、与謝野町の問題を与謝野町の中だけで解決することは現実的ではないのではないか。

町外の企業とも連携して、「与謝野町に住みながら町外の企業にも安心して働くことができること」が重要ではないか。



与謝野町は丹後2市2町で就職フェアを行っており、このような取り組みを加速してはどうか。

提案③	ちりめんは「着物」だけじゃない！ 伝統×新アイデアで、稼げる地場産業へ
------------	--

町の象徴である織物業は、出荷額の減少や後継者不足という危機に直面しています。農業についても出荷額は上昇しているものの、後継者不足が大きな課題となっています。ちりめん産業は、生産者が産業の将来に希望を持てるよう、伝統を守りつつも、新たな販路の開拓、カフェ併設型工房のような新しい見せ方や、着物以外の用途（ネクタイ、シャツなど）の製品開発をより積極的に進め、また、農業分野ではスマート農業の導入を進めるなど、未来に繋がるよう、地場産業の価値を再創出することを提案します。

10年後にありたいまちの姿	
●	伝統産業が現代のライフスタイルや観光と融合し、新しい価値を生み出しているまち。
●	農業や織物が、若者にとって魅力的で稼げる「憧れの職業」となっているまち。

参加者から出た意見	
個人の役割	● 地元の農産物を高くても購入し、地産地消で生産者を支える。 ● 丹後ちりめんの製品（ネクタイや小物など）十分に理解、認識し、購入・使用するだけでなく、知り合いなどに情報発信する。 ● 工場併設のカフェなどを訪れ、産業観光を体験・応援する。
地域の役割	● 丹後ちりめんについて知る機会やイベントをPRする。 ● 着物で街を歩くようなイベントを実施する。 ● 農業の販路拡大を支援する。
行政の役割として住民が期待すること	● 商工会と連携し、着物以外の用途で活用できるアイデアを公募したり、開発に関する補助金を設けたりする。 ● ちりめん製品のブランド化や販路拡大を支援する。 ● 地域おこし協力隊の人に丹後ちりめんの織り手になってもらうなど、若い織り手を増やす。 ● スマート農業や共同農業など、新しい農業のあり方への転換を支援し、参入しやすくする。

地元農産物は、無人販売、道の駅、スーパー
等で購入できる。安くて安心。



銀座松屋の催事コーナーやアンテナショップ
で、ちりめんを販売した時は、外国の方に興味
を持っていただけたようだ。

提案④	「出る杭」は打たずに伸ばす！ 挑戦する人を全力で応援・サポートするまちに
------------	---

企業誘致に頼るだけでなく、町の中から新しい事業を生み出す「起業」が重要であるという声が上がりました。しかし、挑戦を阻む「出る杭は打たれる」、「横並びの安心感」という風土が大きな障壁となっています。地域は、資金やノウハウを持つ経験者によるバックアップを行い、行政は空き家・空き工場や廃校といった未活用資源の利活用を進めるなど、地域と行政が一体となって挑戦する人を地域全体で応援する風土づくりを提案します。

10年後にありたいまちの姿
● 失敗を恐れず、誰もが新しいビジネスや活動にチャレンジできる寛容なまち。 ● 住民の「やりたいこと」や「熱意」が可視化され、サポートや応援し合えるコミュニティがあるまち。 ● 空き家・空き工場や廃校などの地域資源が、新しいビジネスの拠点として有効活用されているまち。

参加者から出た意見	
個人の役割	● 新しくできた店舗やサービスに実際に足を運び、利用して応援する。 ● ボランティアや趣味の延長からでも、自分の技術（例：元織り手など）を活かして仕事にする発想を持つ。 ● チャレンジ精神を持ち、地域の古い慣習にとらわれず行動する。
地域の役割	● 新規事業への資金や応援を募るため、クラウドファンディング等の活用を検討する。 ● 住民同士が自分の「思い」や「やりたいこと」をアピールし合う場（提案の場）をつくる。 ● 経験者が新規事業者のバックアップやフォローを行う。
行政の役割として住民が期待すること	● 挑戦する人を応援し、支え、導く中間支援の仕組みづくりを進める。 ● 住民が互いに思いをアピールし、交流・連携できる「場」（サードプレイス）を新たに創出する。 ● 空き家・空き工場や廃校などの未利用資源の活用を検討し、起業家に提供する。 ● 時代に合ったPR戦略を行い、町の新しい動きを内外に発信する。



新しくオープンした外国の料理
を出すお店に食べに行った。

くらしづくりやひとづくりでも「場の
創設」という話が出ていたので、全てに
共通する課題だと思う。



提案⑤	「ここで働き暮らしたい！」と若者に選ばれるまちへ
------------	---------------------------------

若者が進学などで町を離れる背景には、「仕事の選択肢の少なさ」に加え、「新しいことへの興味関心が薄い」、「住民同士の仲が良く横並びを好むため、思い切った挑戦をしにくい雰囲気がある」といった声が挙がり、地域ならではの風土的課題があることが示唆されました。外部の人や新しい価値観を柔軟に受け入れ、若者に選ばれるまちになることを提案します。

10年後にありたいまちの姿
● 互いの個性を尊重し、誰もがのびのびと挑戦できるまち。 ● 若者や町外通勤者が、誇りと愛着を持ち続けられるまち。 ● 変化を楽しみ、住民全員が「まちの未来」を自分ごととして捉えるまち。

参加者から出た意見	
個人の役割	● 地域の行事に参加したり、休日に町内を散策したりして地域に関心を持つ。 ● 友人や知人に「戻ってこいよ」と声をかける。 ● 人を否定せず、どんな時にも自分らしくいる。 ● お互いに尊敬の念をもって交流することを心掛ける。 ● 年をとっても働き、地域行事に参加する。
地域の役割	● 町外へ通勤している人に向けた交流の取り組みを行う。 ● 「新しいもの」を受け入れる。 ● 押し付けない、昔ながらの習慣を見直す。 ● 新規参入者を受け入れる柔軟性を持つ。
行政の役割として住民が期待すること	● 地元愛を高める取り組みやイベントが生まれるよう、まちの魅力を高める。 ● 企画や会議で終わらず、住民の意見を第一に考え支援を厚くする。 ● コミュニケーションにおける「相互のレスポンスの促進」のような啓発活動を行う。

(2) 暮らしづくり分科会からの提案

暮らしづくり分科会では、第1回・第2回で「空き家」、「公共交通」、「子育て環境」など、生活に密着した課題が幅広く挙がりました。第3回では、これらの課題と町の財政状況を踏まえ、「庁舎・公共施設のあり方」を集中的に議論しました。

人口減少や財政状況を踏まえ、「10年後も誰もが安全・安心に暮らせる持続可能な暮らし」を目指します。そのためには、ICTの活用を前提とした行政拠点のスリム化と、住民同士が支え合う「共助」の仕組みを両輪として進めることが不可欠です。行政に全てを委ねるのではなく、住民自らが地域の課題（空き家、交通、子育てなど）に関心を持ち、できることから行動します。

次項から暮らしづくり分科会からの提案を記載します。



▲暮らしづくり分科会の様子

提案①	「役場に行かなくても OK ?」 地域の拠点で、もっと身近で便利な行政へ
------------	---

財政的な持続可能性を踏まえ、公共施設や庁舎のあり方を根本的に見直すべきとの声が挙がりました。庁舎については、「3つの庁舎で取り扱っている手続きが異なる」といった非効率を解消し、ICTの活用を前提として、地域の拠点で必要なサービスを完結できる「スリム化・分散化」した体制に再構築することを提案します。

10年後にありたいまちの姿
● ICTの活用により「いつでも・どこでも・待たずに」手続きができるまち。 ● デジタルが苦手な人には、身近な地域の拠点で温かい「人のサポート」があり、誰も取り残されないまち。

参加者から出た意見	
個人の役割	● 公共施設のあり方について、自分自身の問題としてしっかりと情報を集め、考える。 ● 庁舎についての議論をする際に、反対する場合はその理由、自分の意見を出す。 ● コンビニ交付やオンライン申請を使ってみる。 ● デジタルを活用すると便利なこと、使い方を周囲の人に伝える。
地域の役割	● 総合庁舎のあり方について、地域で話し合い、意見をまとめる。 ● 不要な配布物を選定するなど、情報伝達の効率化に協力する。 ● 公共施設の管理を自治会や団体等にまかせるのも一つの方法。
行政の役割として住民が期待すること	● オンラインで各種申請ができるシステムを導入し、使いやすい画面にする。 ● 新庁舎建設の要否やコスト比較（新設と今ある庁舎の活用）などを町民に分かりやすく開示し、今ある庁舎を活用して、行政機能の配置や集約のあり方を検討する。 ● 新庁舎を建設するのであれば、異なる用途の施設を導入する「複合化」を検討する。 ● 分かりやすいホームページやSNSなど、情報発信の方法を見直す。 ● 庁舎統合などの際には跡地利用も考える。

提案②	車がなくても大丈夫！最新技術と「お互いさま」の助け合いで安心して暮らし続けられるまちに
------------	--

車が運転できない人でも移動に困らないように、乗合交通の運用改善や、自動運転といった新しい技術の導入を検討するとともに、スーパーの撤退などで困難を抱える「買い物弱者」などを支えるため、行政による支援の隙間を埋める有償ボランティアのような、住民同士の「共助」（買い物支援、乗り合いなど）の仕組みを地域全体で構築・支援していくことを提案します。

10年後にありたいまちの姿
● 「車が運転できないと不便」という現状を乗り越え、自動運転などの最新技術と、地域の助け合いが調和し、誰もが気兼ねなく自由に移動できるまち。 ● 住民と行政がともに考え、使いやすい公共交通を創り上げていくまち。 ● 行政や既存制度ではカバーしきれない「隙間」を、地域独自のボランティアやマッチングシステムで埋め、誰もが安心して暮らし続けられるまち。

参加者から出た意見	
個人の役割	● 自家用車に頼るだけでなく、意識してバスや電車などの公共交通機関を利用する。 ● 近所の人を車に乗せてあげるなど、助け合いを心がける。 ● 乗合交通の運転手などに志願する
地域の役割	● 地域内での乗り合いの仕組みを検討し、住民同士で助け合う。 ● 買い物などで困っている人を助け合うシステムを作る。
行政の役割として住民が期待すること	● 利用実態やニーズを踏まえ、バスや電車の運行内容の見直しを検討する。 ● 乗合交通の運用改善を検討する。 ● 公共交通機関と話し合いをする。



公共交通のサービスを増やすには、税金や人手不足の問題があるので、「無料や安価なサービスをただ求める」のではなく、「コストや廃止リスクといったトレードオフ」を住民も意識すべきではないか

行政の取り組みを発信するだけでなく、住民も取り組みを知りに行くことが大事



働きたい方がいる一方で、バスの運転手などの公共交通の担い手が足りない。うまくマッチングできないか。

提案③	空き家は「困った」じゃなくて「宝」かも？情報の「見える化」でチャンスに変えよう
------------	--

地域の景観と安全を脅かす空き家問題に対し、空き家の情報を所有者の意向を含めてマップ・データベース化された情報を基に地域と行政の協働により、見守りや有効活用（移住者への橋渡し、企業誘致など）を進める体制を構築することを提案します。

10年後にありたいまちの姿
● 空き家を「地域の資源」として捉え、地域と行政の協働により、所有者と利用希望者に働きかけ、有効活用されるまち。 ● 地域ぐるみで景観や治安が守られているまち。

参加者から出た意見	
個人の役割	● 将来、権利関係や親族間のトラブルで「手が出せない空き家」にならないよう、元気なうちに親族間で所有権や管理の方針（売却・活用・解体）について話し合っておく。 ● 近隣住民として、空き家周辺の草刈りやゴミ拾いを行い、情報を行政へ提供する。
地域の役割	● 町内会などで空き家の所有者や意向を把握し、情報を整理する。 ● 空き家を活用したい人（移住者など）との橋渡し役を担う。
行政の役割として住民が期待すること	● 地域と連携し、空き家の情報を収集・更新する。 ● 空き家バンク制度の周知を徹底し、分かりやすい情報発信を行う。 ● 所有者と利用希望者の間に入り、意見確認や相談対応などの調整を支援する。

提案④	次世代が定着し、健やかに育つ魅力あるまちへ！若者・子どものための環境づくり
------------	--

若者がずっと住みたいと思える町にするためには、子育てや教育環境の充実はもちろん、この町で暮らす「楽しさ」や「将来の可能性」を感じられる環境づくりが欠かせません。未来を担う子どもたちのために、天候に左右されない屋内遊戯施設や、若者が集える自習スペースを確保することを提案します。

10年後にありたいまちの姿	
	● 天候に左右されずに子どもたちが思い切り遊べる環境があるまち。 ● 若者がこの町に魅力を感じるまち。 ● 通学時の身体的・心理的負担が軽いまち。 ● 子どもたちが静かに集中して学べる場所が地域の中にあり、安心して成長できるまち。

参加者から出た意見	
個人の役割	● 町内外の人と与謝野町のPRポイントを話し合う。 ● 町内の魅力や歴史について、親子で話題にするなど、関心を持つ機会を作る。 ● 小学生の鞆を、ランドセルより軽いランリュックに変える。 ● 公園のゴミ拾いや遊具の点検など、身近な環境整備に参加する。 ● 集える場所として、図書館、クアハウスの存在を伝える。
地域の役割	● 通学路の日陰づくりや雪かき、公園の整備（草刈り）を行う。 ● 町の食材、産業と観光を結びつけ、外に発信する。 ● 隣組や区の会議で、町の魅力化について協議する。 ● 公民館の活用、使える場所を伝え合う。 ● 地域の公民館を利用して、地域の高齢者と子供が交流できる場を設ける。
行政の役割として住民が期待すること	● バス通学ができる範囲を広げる。 ● まちの魅力化について町民の意見を聴き、協議できる機会を設定する。 ● 小中学校で指定のランリュックを導入または配布などを検討する。 ● 公園の遊具を更新し、室内公園の設置を検討する。そのための費用については公園基金をつくり、利用者から寄付を募る。 ● 若者が勉強や交流に使える場所（自習スペースなど）の確保。 ● 下校後の子供が図書館に集える取り組みを行う。



ちょっとした用事があって一時的に子供を預けたいときに、地域の高齢者の手を借りられると良いのではないか。

知らない人の家に預けるのは心配だけど、公民館などの公共の場所なら預けても良い。



提案⑤	「困った時はお互いさま！」日々のくらしの困りごとを共助で支え合おう
------------	--

誰もが住み慣れた地域で安全に、かつ快適に暮らし続けられるために、老朽化したインフラ対策など生活の安心を支える基盤整備などが重要です。また、複雑なゴミの分別方法など、知りたい情報をいつでもどこでも知ることができる仕組みや、行政の施策とボランティア等の共助を連携させ、日々の不便や不安を解消する仕組みを提案します。

10年後にありたいまちの姿
● 日常の不便や不安が解消され、誰もが安心して暮らせるまち。 ● 安全なインフラと持続可能なコミュニティが引き継がれているまち。

参加者から出た意見	
個人の役割	● 買い物に困っている人に声をかけ、手伝えることを見つける。 ● 車に乗れる人が近所の人を店に連れて行く。 ● 近所での助け合いをする。(野菜をあげるなど) ● ゴミの分別方法を自分でしっかりと調べ、実践する。 ● ごみの分別説明ボランティアをする。 ● 地域の役員を皆で支える雰囲気づくりに協力する。 ● 道路や河川の整備すべき箇所をチェックする。 ● 夜道が暗いので、家の前にセンサー付き電灯を取り付ける。
地域の役割	● 困っている人を助け合うシステムを作る。 ● 地域の商店が移動販売をする。 ● 住民ボランティアがゴミ分別の研修を受け、地域での啓発を担う。 ● 役員の仕事内容をマニュアル化し、誰でも担えるようにする。 ● お祭りの日程を休日に見直すなど、参加しやすい工夫をする ● 地域のイベントをさらに盛り上げ、町の魅力として発信する。 ● 地域として道路や河川の整備の要求をする ● 店舗誘致のため空きスペースなどを提供する。 ● 地区ごとにセンサー付き電灯を購入し、家のない場所にも電灯を取り付ける。
行政の役割として住民が期待すること	● ゴミの分別方法について、より分かりやすく PR する。 ● 住民ボランティア（ゴミ分別支援員）の育成研修を実施する。 ● 区費の設定について、各区へ説明を促し、話し合いを支援する。 ● 道路の補修や街灯の増設、河川の整備などを計画的に進める。 ● 空き家を活用したコンビニ店程度の大きさの店舗の開業を支援する。

(3) ひとつづくり分科会からの提案

第1回、第2回の議論を通じて、私たちはまず、「交流の場が減り、人と人との関係が希薄になっている」という現状認識を共有しました。特に第3回では、この希薄さの根底にある問題として、「虐待など、気にはなるけど『言っちゃいかん』という気持ち、閉鎖的な雰囲気」、「多様な背景を持つ人々への理解不足と心の壁」があることが深く語られました。

私たちが目指す10年後の与謝野町は、世代や立場、障がいの有無や国籍など、どんな違いがあっても、他者を受け入れることのできる、風通しの良いまちです。まず大事なのは、住民一人ひとりが、他者を受け入れる心、「オープンマインド」を持つことです。また、自由に交流できる場、「オープンスペース」づくりも欠かせません。オープンスペースに集う人の輪から、自分たちでこの町を良くしていこうとする、「オープンコミュニティ」の創出を目指します。そして、オープンコミュニティから生じる活動がまちに広まることで、誰もが受け入れられる「オープンタウン」が実現できると考えました。「オープン」をキーワードにした、4つのステップから、5つの具体的な提案をまとめました。



▲ひとつづくり分科会の様子

「オープン」なまちづくりの4ステップ

1. オープンマインド

受け入れる心の醸成「寄り添い」



2. オープンスペース

オープンマインドを持った住民の交流の場



3. オープンコミュニティ

オープンスペースから生まれる自助・共助の活動



4. オープンタウン

誰でも受け入れられる風通しの良いまちへ



提案①	「思ったことをちゃんと言える」寄り添いの心を育むまちへ
-----	-----------------------------

地域には、「噂になるのが怖い」といった閉鎖的な雰囲気根強く存在していることが浮き彫りになりました。また、「行政に相談をしても（活用可能な）制度活用の案内にとどまることもある、そうではない『寄り添い』が欲しい」という意見もありました。この現状を改善し、誰もが安心して思ったことをちゃんと言える、一人ひとりが「寄り添いの心を持ったまち」を提案します。また、行政の取り組みとして、既存の制度では対応できない個人の悩みに対し、寄り添い型の相談・支援機能の構築を提案します。

10年後にありたいまちの姿
● 他者を受け入れる心（オープンマインド）が浸透し、安心して助けを求められるまち。 ● 制度ありきではなく「人」として支えられるまち。 ● 窓口が一本化され、誰もが迷わずに「やりたいこと」や「困りごと」を伝えられるまち。

参加者から出た意見	
個人の役割	● 虐待や困りごとに対して、「気にはなるけど言っちゃいかん」「誰が言ったか特定されて攻撃される」といったバリアを自分の中で作らず、関心を持ち、勇気を持って行動する。 ● 人を否定せず受け入れる、どんな時にも自分らしくいる。 ● 年をとっても働き、地域行事に参加する。
地域の役割	● 田舎特有の「噂が回るのが早い」という閉鎖的な背景を変え、多様な人が住みやすい環境をつくる。 ● 行政（公）と個人（私）の間にある「隙間」を埋めるような、つなぎ役やコーディネーターを地域の中に育てる。 ● 「弱い者いじめは恥だ」とみんなが当たり前を感じるような地域を育てていく。
行政の役割として住民が期待すること	● 制度の案内だけでなく親身になって相談に乗る、当事者に寄り添うための人材育成を進め、相談窓口の一本化や新たな部署の設置を検討する。 ● 虐待通報など、住民だけでは抱えきれない問題（子供の心のケアなど）に対し、適切に介入・対応する。

提案②	「当事者の声」を聞きたい。リアルな体験で、心のバリアフリーを実現しよう
------------	--

「障がいのある方など、配慮が必要な方への理解が進みにくい」、「生活の中で関わりが少ない」という課題意識が共有されました。参加者からは、「LGBTQ+や更年期の不調の話を直接聞くと、本で読むより鮮烈に理解できる」との意見があり、教科書的な知識ではなく、当事者の体験談を聞き、「車椅子乗車体験」などで「相手を知る努力をする」機会が重要だと認識しました。住民同士が互いに多様性を認め合い、尊重し合えるまちづくりを提案します。

10年後にありたいまちの姿
● 「心のバリアフリー」が浸透し、多様性が「当たり前」の風景になっているまち。 ● 「当事者の生の声」が響き合い、オープンに語り合えるまち。 ● 地域の中で「個」として尊重され、暮らせるまち。

参加者から出た意見	
個人の役割	● 噂や世間体を恐れて「見て見ぬふり」をするのではなく、必要な時は声を上げたり介入したりする勇気を持つ。 ● 障がい者福祉事業者などで作っている商品を購入する。
地域の役割	● 車椅子乗車体験やアイマスク歩行など、様々な立場の人の状況を体験・学習できる勉強会を開き、住民の理解を深める。 ● 地域の行事などで、障がいのある方も役割を持って参加できるように働きかける。 ● 地域(組)全体で、こういった配慮が必要な方がいるのか把握して、共有してもよい部分は知らせる。それを踏まえて、地域のイベント・行事を、誰でも参加できるような内容にする。
行政の役割として住民が期待すること	● 単に制度の案内等にとどまることなく、これまで以上により親身になった相談対応に努める。 ● 地域での「心のバリアフリー」醸成のための体験講座などを企画・支援する。 ● 歩道の段差解消など、物理的なバリアフリー整備を計画的に進める。 ● 行政がリーダーシップをとって「オープンなまちづくり」「心のバリアフリー」について、理解がひろがるような情報発信や啓発への取組を進める。

提案③	「用事がなくても、行ってもいい？」 誰もがふらっと立ち寄れる「たまり場」をつくろう
------------	--

地域のつながりが希薄になった今、「家でも職場・学校でもない、第三の場所が欲しい」という声が最も多く上がりました。既存の公民館は「利用手続きが必要で面倒」といった、住民が「利用しにくい」という課題がありますが、気軽に集まれる場が求められていると考えました。そこで、手続き不要で、目的がなくても世代を超えて「ふらっと立ち寄れるたまり場」が、空き家や廃校なども活用してまちなかに増えていく地域づくりを提案します。

10年後にありたいまちの姿
● だれでも、特別な目的がなくても立ち寄れる「たまり場」が身近にあるまち。 ● 公民館や空き家などを活用した、人が集まる温かいコミュニティ拠点があるまち。 ● 行政手続きの壁がなく、住民が「やりたい」と思った活動がすぐに実現できるまち。

参加者から出た意見	
個人の役割	● 近所の人に出会ったら挨拶し、積極的に声をかける。 ● 地域の行事やサークル活動（料理、手芸など）に気軽に参加する。
地域の役割	● お祭りやイベントの際に、移住者や新しい住民を紹介したり、手伝ってもらったりする場を設ける。 ● 月に何回か地区で集まる機会を設けるなど、定期的な交流の場を皆で考える。 ● 地域の公民館を利用して集まる場を作る。あまり準備が必要なもの(大きなイベント)ではなく、何かしらの共通点を見つけて会を開くようなイメージ。
行政の役割として住民が期待すること	● 地元愛を高める取り組みやイベントが生まれるよう、まちの魅力を高める。 ● 移住者や外国人など、どんな人が地域にいるのかを知ることができる場づくりを支援する。 ● 各地区の集まりが定期的に行われるようサポートする。

提案④	「先生はなんと小学生！？」 みんなの得意がつながるコミュニティ
------------	--

効率化を図るためのデジタル技術の活用ではなく、「子供や若者が高齢者にスマホ操作を教える」といった、様々な世代が交流できる機会と位置付け、子供や若者を含めた誰もが、自身の得意分野で「先生」として活躍できるまちづくりを提案します。また、住民一人ひとりの特技や経験を地域に活かすため、ばらずし教室やバリアフリーの話など、住民の「私これできます」を登録する「講師バンク」のような仕組みを提案します。

10年後にありたいまちの姿
● 世代を超えた「教え合い」が日常となり、情報格差がないまち。 ● 「地域の知恵」が可視化され、住民同士が助け合えるまち。 ● 「隠れた特技」が輝き、誰もが先生になることで「楽しい」、「役に立った」という喜びを感じられるまち。

参加者から出た意見	
個人の役割	● 自分の周りの人に口コミで情報を伝える。 ● 地域の人とコミュニケーションを取り、情報を得る。 ● 「町内 Wikipedia」のような、多様な人材が集い、議論を交わせる空間づくりを行う。 ● 分からないことは「分からない」と声を上げ、近所の詳しい人や子どもたちに素直に聞く。
地域の役割	● 公民館や廃校などを活用し、地域の人が年齢を問わず誰でも先生になれる学びの場をつくる。
行政の役割として住民が期待すること	● 「町内 Wikipedia」や「講師登録制度」のような考え方を参考にしながら、住民のスキルとニーズをマッチングさせる仕組みづくりを支援する（情報の安全性確保も含む）。 ● 地域の新しい情報伝達の取り組み（デジタル回覧板など）を支援する。 ● 検索しにくい現在のデータ放送などを見直し、AI や音声認識技術を活用して、高齢者でも声で検索できるようなシステムを導入する。

提案⑤	「私にもできること、きっとある！」全員活躍のまちづくり
------------	------------------------------------

「参加しないと始まらない。活動が面白ければ人は集まる」という声が挙がりました。子どもたちの安全については、「地域でパトロールをしているが、毎日やるべき」という意見や、与謝野町社会福祉協議会が行っている「わんわんパトロール隊員」による「散歩しながら見守り」のような、住民が無理なくできる「全員参加」の仕組みを提案します。

10年後にありたいまちの姿
● 住民一人ひとりが「お客様」ではなく「まちづくりの主役」として、自分にできることを実践しているまち。 ● 住民が主体となって町の課題を解決していけるまち。

参加者から出た意見	
個人の役割	● 犬の散歩やランニング、ウォーキングなどの際に防犯ベストを着るなど、「ながら」で町の見守りを行う。 ● 「誰かがやってくれる」ではなく、「自分ごと」として捉え、まずは地域の活動に参加してみる。
地域の役割	● ボランティア活動への参加を促す「ボランティアポイント」のような、参加することに喜びやメリットを感じられる仕組みを考える。 ● 新しい住民や移住者に対して、積極的に話しかけ、地域の活動に参加を促す雰囲気をつくる。
行政の役割として住民が期待すること	● 既存の団体・組織等への支援だけでなく、新しく生まれる緩やかなつながりやグループ活動に対しても支援を行い、時代に合ったコミュニティ形成を促す。

5 中高生よさのみらい会議からの提案

中高生よさのみらい会議は、与謝野町の次代を担う中学生・高校生が集い、A 班、B 班に分かれて 10 年後のまちの未来について真剣に語り合いました。冒頭、山添町長からの「中高生の声をまちづくりに生かしたい」というメッセージと、ナビゲーターの伊藤伸氏による「デジタル技術が地方の不便を『強み』に変える」という講演を受け、参加者たちは従来の枠にとらわれない自由な発想で議論を展開しました。

議論全体を通して見えてきたのは、「都市のような利便性とワクワク感」を求めつつも、「豊かな自然や地域の温かさ」といった与謝野町ならではの価値を大切にしたいという、このまちに住む中高生の想いです。

多くの生徒が「遊ぶ場所や商業施設が欲しい」と願う一方で、議論が深まるにつれ、「新しいものを作るだけでなく、天橋立や丹後ちりめんといった今ある宝物をどう磨き上げるか」、「従来の行政区にとらわれずに、周辺の市町とともに未来を考えてはどうか」、「デジタルを使えば、距離の壁を越えて働いたり学んだりできるのではないか」という意見が挙がりました。

また、交通の不便さや居場所の不足といった課題に対しても、単に行政への要望で終わらせず、「自分たちも SNS で発信できる」、「地域の人と挨拶を交わすことから始めたい」といった、「自分なら何が出来るか」という視点で議論を深めました。

これらの議論を集約し、各班から「10 年後にありたいまちの姿」に向けた提案を整理しました。



▲中高生よさのみらい会議の集合写真

中高生よさのみらい会議 A 班からの提案

- ① 「知られていない」を「行きたい！」へ。世界に誇れる与謝野ブランドづくり
- ② ワクワクが集まる！みんなが笑顔になれる遊びと交流の拠点
- ③ どこへでも自由に行ける！快適でスムーズな移動手段

中高生よさのみらい会議 B 班からの提案

- ① 学校でも家でもない、「サードプレイス」でつながろう！
- ② 「ここで働きたい」が見つかる！未来の選択肢を広げる
- ③ 「行きたい」を諦めない！もっと自由な移動スタイル

(1) 中高生よさのみらい会議 A 班からの提案

中高生よさのみらい会議 A 班の議論は、参加者一人ひとりの「将来の夢」を語ることからスタートしました。「理学療法士」「IT 系エンジニア」「警察官」「英語の先生」など、多様で、具体的な目標を持っていることが印象的でした。

「どんな与謝野町なら住みたいか？」というテーマでは、中高生ならではの「生の声」が次々と飛び出しました。「欲しいものがすぐ手に入るショッピングモールが欲しい」「映画館や大型娯楽施設のような遊ぶ場所がない」といった意見や、「スポーツの練習場所がなく、親に送迎してもらって京丹後や福知山まで行っている」、「バスの本数が少なくて不便」といった生活上の悩みが共有されました。その結果、7 割の参加者が「今ある環境の充実よりも、新しい施設や機能を呼び込みたい」と回答し、変化を求める強い思いが浮き彫りになりました。

また、まちのブランドについても議論を深め、「出身地を聞かれても、伝わらないから『天橋立の近く』と言ってしまう」、「本当は与謝野町という名前で売り込みたい」、「与謝野といえばコレ！というものが欲しい」という声も挙がりました。解決策として、「一字観公園を SNS 映えする写真スポットにする」、「与謝野町から見える天橋立の景色をアピールする」といった意見が挙がりました。

最後は行政への要望だけでなく、「自分たちで SNS を使って魅力を発信する」「公園の草刈りや整備を手伝う」といった、「自分たちにできること」にも目を向け、行政・地域・若者が一緒になってまちをつくるための 3 つの提案をまとめました。



▲中高生よさのみらい会議 A 班の様子

提案①	「知られていない」を「行きたい！」へ。世界に誇れる与謝野ブランドづくり
------------	--

議論の発端は、「町外の人に『与謝野町』と言っても伝わらず、結局『天橋立の近く』と説明してしまう」という、参加者の体験談でした。しかし、この課題に対し、単独での知名度向上に固執するのではなく、「隣接する世界的観光地『天橋立』のブランドを活用すべき」という意見が挙がりました。行政によるPRに頼るだけでなく、住民一人ひとりがSNS等で「天橋立が見える町」としての魅力を発信したり、地域全体で来訪者を歓迎したりする意識を持つことによるブランド構築を提案します。

10年後にありたいまちの姿
● 「与謝野町といえばコレ！」と誰もが即答できる特産品やシンボルがあり、町外の人に自信を持って紹介できるまち。 ● 天橋立だけでなく、一字観公園や大江山、ちりめん街道など、与謝野町独自のスポットがSNSで拡散され、多くの観光客や若者が訪れるまち。 ● 豊かな自然や伝統産業が、「与謝野だけの価値」として輝いているまち

参加者から出た意見	
個人の役割	● 与謝野町の魅力や「映えスポット」を探して SNS に投稿する。 ● 出身地を聞かれたら「天橋立の近く」だけでなく「与謝野町」と誇りを持って答える。
地域の役割	● ポスター掲示などで地元の名物を積極的に宣伝する。 ● 農業体験や学生向けのイベントを行い、地域の産業（農業・ちりめん）に触れる機会をつくる。 ● 祭りなどの行事を増やし、町外の人でも参加できるようにする。
行政の役割 として住民 が期待する こと	● 天橋立や近隣地域と連携しつつ、与謝野町独自の魅力を発信する。 ● 一字観公園などを写真スポットとして整備し、観光客を呼び込む。 ● 祭りやイベント開催のための補助金などで活動をバックアップする。

提案②	ワクワクが集まる！みんなが笑顔になれる遊びと交流の拠点
------------	------------------------------------

「本格的なスポーツ練習ができる施設がなく、保護者の送迎で京丹後まで通わざるを得ない」という意見や、「休日に過ごせる場所が限られている」などの意見が挙がりました。行政に施設整備を求めるだけでなく、「自分たちもゴミ拾いなどで環境維持に協力する」、「既存の公園や施設の情報を収集・利用する」といった、利用者としての責任を果たす重要性についても議論しました。住民によるソフト面（利用・管理）の協力を前提としたハード面の充実を提案します。

10年後にありたいまちの姿
● 映画館やショッピングモールなど大型娯楽施設があり、遠出をしなくても町内で一日中遊び尽くせるまち。 ● 本格的なスポーツ複合施設があり、学校の枠を超えてスポーツに熱中し、合宿などで人が集まるスポーツのまち。 ● 身近な公園がきれいに整備され、子供から高齢者までが自然と集まる憩いのまち。 ● 夜間でも明るく、若者や住民が安心して気軽に立ち寄れる「第三の居場所」があるまち。

参加者から出た意見	
個人の役割	● 自分たちの欲しい施設や環境について声を上げ、署名活動などを行う。 ● 地元の公園の場所を把握し、積極的に利用する。 ● 部活動やスポーツに打ち込み、まちを盛り上げる。
地域の役割	● 身近な人に話して仲間を集め、地域としての要望をまとめる。 ● 公園の草刈りなどの整備をサポートし、気持ちの良い空間を維持する。 ● 祭りなどの行事を増やし、町外の人でも参加できるようにする。
行政の役割として住民が期待すること	● ショッピングモールや娯楽施設、企業の誘致に動く。 ● スポーツ施設や練習環境を整備し、スポーツを通じた交流人口を増やす。 ● 町内の遊び場情報を収集し、住民にわかりやすく提供する。 ● 街灯を設置するなど、生活インフラを整える。

提案③	どこへでも自由に行ける！快適でスムーズな移動手段
------------	---------------------------------

「バスが1時間に1本しかなく、一本逃すと親を呼ぶしかない」という意見が挙がりました。これは、若者が「住みにくい」と感じる大きな要素ではないでしょうか。議論では、行政によるインフラ投資（増便・道路整備）を求めると同時に、利用者側もマナー遵守や積極的な利用に努め、公共交通を維持・存続させる「買い支え」の意識を持つべきであるとの結論に達しました。利便性の良い環境づくりを提案します。

10年後にありたいまちの姿
● バスの本数が多く、免許を持たない学生や高齢者でも、町内や周辺都市へ自由に移動できるまち。 ● 道路のひび割れがなく、カーブミラーなどが整備され、交通事故のない安全で快適なまち。

参加者から出た意見	
個人の役割	● 移動手段として、バスや電車を積極的に使う。 ● 交通ルールを守り、安全運転を心がける。
地域の役割	● 道路を汚さないよう美化活動に取り組み、地域の景観を守る。 ● 危険な場所などの情報を共有し、地域の安全を見守る。
行政の役割として住民が期待すること	● 公共交通機関とともにバスの増便や路線の充実を図り、誰もが移動しやすい環境をつくる。 ● インフラ投資により力を入れる

(2) 中高生よさのみらい会議 B 班からの提案

中高生よさのみらい会議 B 班の議論は、当初「まちに何も無い」「不便だ」という意見から始まりました。特に「遊ぶ場所がない」、「交通が1時間に1本しかなく、やりたいことができない」といった意見が挙がり、多くの生徒が「将来は町を出ていきたい」と考えていました。

しかし、対話が進むにつれて、大型商業施設のような「箱物」をねだるのではなく、「今ある公民館のような資産をどう活かすか」という視点へと変化しました。

居場所づくりでは、入りづらい「公民館」を開放し、若者が気兼ねなく集まれる「基地」にしてほしいという提案に至りました。

交通に関しても、行政にデマンド交通やドローンなどの新技術導入を求めつつ、バス利用については路線維持のために住民自身が「乗って残す」という当事者意識が不可欠だという結論に達しました。

仕事についても、「家で働けるなら住み続けたい」というリモートワークへの期待や、特産品や観光地が「あるのに活用されていない」という気づきが生まれました。

行政任せにせず、「自分たちが地域を知り、使い、支える」という共助の姿勢と、デジタル技術を組み合わせることによる魅力ある10年後のまちに向けて3つの提案をまとめました。



▲中高生よさのみらい会議 B 班の様子

提案①	学校でも家でもない、「サードプレイス」でつながろう！
------------	-----------------------------------

議論の出発点は「集まれるところがない」、「交流できる場所がない」という現状認識でした。これに対し、「商業施設の誘致」、「今ある施設の活用」という2つの考え方を基に議論を深めたところ、「公民館や公園など、今ある施設を活用すれば解決できるのではないか」という意見が多くを占めました。行政は「若者が公共施設を気兼ねなく利用できるためのルール緩和や開放の仕組みづくり」を担い、地域は「公民館を開け」、「若者が行きやすいようにする」という寛容な環境を構築し、若者はその場所を主体的に「自由に使う」など、それぞれ主体が役割を担う「居場所づくり」を提案します。

10年後にありたいまちの姿
● 既存の公民館が若者の基地になるまち。 ● 都市機能と地域の自然が共存するまち。 ● デジタルで『面倒』を突破できるまち。

参加者から出た意見	
個人の役割	● （施設を）自由に使えるようになる。 ● 知らない公園が多いので把握する。 ● 自分たちで楽しむ企画（映画会など）をする。
地域の役割	● 公民館を開ける。 ● 若者が入りやすい・行きやすい雰囲気づくりを行う。
行政の役割として住民が期待すること	● 公民館等の施設使用申請手続きをデジタル化し、紙の申請をなくす。 ● 中高生が勉強や交流に使える場所を設ける。 ● 町内にある遊び場の情報を収集し、提供する。 ● 空き家などを改修してカフェや拠点にする支援を行う。

提案②	「ここで働きたい」が見つかる！未来の選択肢を広げる
------------	----------------------------------

「将来の夢を叶えるには、ここには仕事がない。愛知や東京に行くしかない」という声が挙がりました。しかし、働き方の変化に話が及ぶと、「リモートワークが出来るなら今住んでいる場所で仕事がしたい」という声も挙がりました。この背景には、魅力的な仕事がないだろうという根強い思い込みに加え、「この町にどんな会社があるのか正直知らない」という情報不足（ミスマッチ）があることが明らかになりました。行政による雇用創出やマッチング機会の提供に加え、若者自身もインターンシップや企業研究を通じて地元の産業を「知る」努力をすること、そして地域側も若者に魅力を伝える発信努力を行うことを提案します。

10年後にありたいまちの姿
● 一度外の世界を知った若者が、心から『戻りたい』と思えるまち。 ● 『好きな場所で、好きな仕事』が当たり前になる、新しい働き方のまち。 ● 地域の『宝』が仕事になり、若者の誇りと挑戦を生み出すまち。

参加者から出た意見	
個人の役割	● ずっと地元にいるだけでなく、「外へ出てみる」、「外の仕事を見る」ことで視野を広げる。 ● 「何もない」と考えずに、地域にどんな仕事があるか知る。 ● リモートワークなどが可能なら、「今住んでいる場所で仕事をする」という選択肢を持つ。
地域の役割	● 地域の良さを周りと共有し、発信していく。 ● 大江山やちりめん街道などの資源を、大々的にアピールすることで、人が来る仕組みをつくる。
行政の役割として住民が期待すること	● 町外に出るチャンスを提供する。 ● 企業のリモートワーク等の環境整備を後押しする。 ● 企業の誘致を進める。

提案③	「行きたい」を諦めない！もっと自由な移動スタイル
------------	---------------------------------

バスや電車が「1 時間に 1 本しかなく、遊びや部活に行きづらい」という、地域交通に関する課題が挙がりました。一方で、利用者が少なければ路線維持が困難であることから、ただ行政任せにするのではなく、住民と行政がともに支える交通の在り方を考えました。

住民は「利用して残す」という当事者意識を持ち、積極的な利用や乗り合いへの協力によって地域の足を支え、行政には、単なる増便だけでなく、デマンド交通やドローン配送、手続きのデジタル化など、新技術の導入による自由な移動環境の構築を提案します。

10 年後にありたいまちの姿
● 「1 時間に 1 本」の壁を超え、行きたい時に自由に動けるまち。 ● 住民が「乗って支える」意識を持ち、多様な移動手段が共存するまち ● テクノロジーで「移動しなくても良い便利さ」も選べるまち。

参加者から出た意見	
個人の役割	● 移動手段として、公共交通を積極的に使う。 ● 身近な人になにが不便なのか聞く。
地域の役割	● 予約型の乗り合いバス（デマンド交通）のような仕組みを、住民同士が協力し合って利用する。
行政の役割として住民が期待すること	● （バス・電車の）本数を増やし、30 分に 1 本ぐらいにする。 ● 時間を分かりやすく提示する。 ● 雪の日や災害時でも機能する、あるいは代替手段を確保する。 ● 移動しなくても済むよう、行政手続き等のデジタル化（AI 活用・ネット申請）を進める。 ● ドローンが飛び交って荷物を届けるような物流システムを整備する（買い物難民対策）。

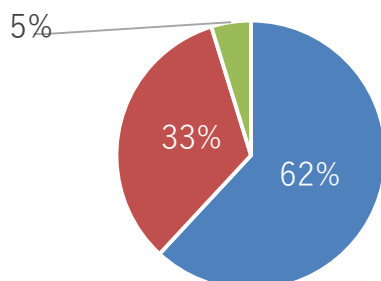
6 参加者アンケート

(1)第 4 回終了後のアンケート結果

あなたが思う「10 年後に残したいモノ・コト」を教えてください。※抜粋

- 与謝野町の風景（与謝峠から見える加悦谷の景色、神社石段から見える街並み、与謝峠から見る与謝野の街並み、SL、SL 広場、大名行列、阿蘇シーサイドパーク）。
- 地域の祭り、季節行事、伝統行事(夏祭り、クリスマス会、神楽、区民大運動会など)。
- まつりごとには必要で大好きな、ばら寿司、栗入り赤飯
- 子どもたちが自然豊かな環境で成長する
- 丹後ちりめんの製品、ちりめん街道
- ブランド米とそれを育てる田んぼ
- 与謝野ホップ
- スーパー等の生活用品を買い物できる場所。
- 与謝野町ならではの飲食店。
- 暮らしの環境が、後継者がいないから維持ができなくなならないように、手入れしない事で荒廃しないこと。
- 一人暮らしの方がお話できる場所など、一緒に友達ができることが良いと思います。
- 地域の共助（困ったら助け合え、支え合える温かい繋がり、思いやりの心、挨拶がかわせる地域の関係性）
- 今ある地域の繋がりを、風通しがよく(足を引っ張るお節介は無く、高め合うお節介)、他地区との交流も活発な町。(残すという守りより、つくるという攻め)
- 老若男女問わず安心して楽しく暮らせること。
- 先代が築きあげた施設。家を離れても、のんびりできる場所。また、住所特例として他府県から来られ住まれる場所として。
- 少しの手入れで、地域の支える施設のあり方・施設職員の不足の中でも、磨きあげられた技術の人材が地域を支える場所として 10 年後も残したい。
- よさのみらい会議のように意見を交換する場。
- まちへの希望を次世代の人が持てること。

第4回よさのみらい会議に参加してみていかがでしたか。	とても良かった	良かった	どちらともいえない	良くなかった	全く良くなかった
	13	7	1	0	0

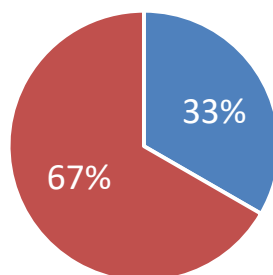


■ とても良かった ■ 良かった ■ どちらともいえない

その理由をお聞かせください（自由記載欄）※抜粋

- 個人個人の思いが知れる。地元愛を感じる方が集まった感じがします。危機感を持つ方が多く感じる。
- みなさんがそれぞれに与謝野町のことを考えておられることを知れた。よさのみらい会議の場があり初めて、自分自身も与謝野町のことを考えているんだなと思えた。悪い面もありつつ、希望ある未来になって欲しいと願え、それを伝えることができた。与謝野町が好きなことを実感できた。
- 参加メンバーの、秘めたる与謝野町への思いを聞かせてもらえた事。
- これまでの会議で皆で出した意見がわかりやすくまとめられており、それをさらに様々な立場から議論したり役場の職員さんのお話が聞けたりして、さらに深まりがあったから。
- 会議のコーディネートが素晴らしく、町民と役場だけではあそこまでの深まりはないと思う。それぞれの立場の視点や意見があったからこそ、より良い議論ができた。
- いろいろな意見が聞けてよかった。
- 参加されている方が皆前向き。前向きな声からは発見があり、私にとってもプラスが多かった。
- いろんな意見を言えて活発な議論が出来たから。
- 世代間が交流し、与謝野町の未来について変化や想いを発信出来る場所だったと思います。「こうなって欲しいな、コレがこうなれば良いのに」とびっくりするくらい、素直な言葉が出て、こちらが“はっ”とさせられる。こんな経験は中々できないように思います。本当に良い経験をさせていただきました。ありがとうございます。

会議での対話を通して、「自分ごと」として地域を考えるきっかけになりましたか。	強くそう思う	ある程度そう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
	7	14	0	0



■ 強くそう思う ■ ある程度そう思う

その理由をお聞かせください（自由記載欄）※抜粋

- 「自分ごと」として捉えるきっかけになった。よさのみらい会議の場があり初めて、自分自身も与謝野町のことを考えてるんだなと思えた。悪い面もありつつ、希望ある未来になって欲しいと願い、それを伝えることができた。与謝野町が好きなことを実感できた。
- これまでは、自ら傍聴に行くなどしてこなかったですが、会議を通して、地域の一員として、自分には何が出来るのか？改めて考えるキッカケを頂きました！
- よさのみらい会議に参加するようになってから、町の SNS や YouTube、広報よさの、有線テレビ(KYT)など、あらゆるツールを活用し、町の情報を知ろうとするようになった。そして、これまでどこか他人事で「こうだったらいいのに」とただ思っていたことを、自分に何が出来るか、どのツールが使えるかなどを考えるようになったから。
- 「誰かがするだろう、やってくれるだろう」では、目の前は開かない。一步踏み出さないと足跡は残らない。町民がそんな思いでいたら、きっと変化が起きる。そんな与謝野になって欲しいです。"
- 協議をしていく中で、問題点が具体化して町政について考えやすくなったから。
- 実際にこの先もこの町で暮らしていくなら、自分たちの生活にも直接影響があると思ったため。
- やはり、「自分ごと」で考えないとすぐ目の前まで起きている色んな事、物がすたれ、無くなっていったりする。だからこそ、魅力ある町づくり、若者が帰りたくなるような町づくりをみんなで考える大切さを知りました。

(2) 会議全体を通じてのコメントや感想 ※抜粋

- これで終わりでは無く、続けて下さい。これをキッカケに次回開催を願う。
- 町のことを自分ごととして考える良いきっかけとなりました。
- デジタルや AI について学べたことは、今後の自分の人生にとっても役に立つと思います。良い経験ができました。
- 「ひとづくり」の班では、障がいのある人もない人も心のバリアをなくそうという話も出ていました。心のバリア、差別やいじめはこのように軽い気持ち、少しの意識の欠如から始まると思います。12 月は人権意識を高めるべきともいわれる月です。1 人 1 人が言葉を発するまでに一度、それが誰かを下げていないか、誰かが傷つくのではないか、その意識を持つことが大切なのではないかと思います。町の未来を考える上でも人権の意識は大切にしていきたいです。
- とにかく若い方、年を重ねた方でも明日には何が起こるか分かりません。人生山有り谷有り。どうか一人一人が一日一日を大切に 10 年後の与謝野町を明るく楽しい街になってゆく事を心から願っています！
- 今回のよさのみらい会議は近隣市からも傍聴や関心を持っておられる方もいた。10 年後を見据えると与謝野町の課題を与謝野町だけで議論して解決を図っていくことは現実的には厳しくなってくるのではないかな。
- もし、新たな展開があれば、今回のような無作為抽出の「自分ごと化会議」を与謝野町、京丹後市、宮津市、伊根町の丹後 2 市 2 町合同で混合でやってほしい。無作為抽出は各市町で行い、各市町の無作為抽出された住民が一堂に会する会議として出来ないか。2 市 2 町共通の課題でありテーマで行う感じが望ましい。自治体の垣根を越えて課題解決を図っていく必要性を感じる。
- 司会進行ご苦労様でした。10 年後の与謝野町の変化を見届けて下さいね。きっと与謝野変わったねと言ってもらえますよ。(独り言より)
- 今回の会議にあたり、町職員の皆様にも多岐にわたって教えてもらうことがあり、大変お世話になりました。ありがとうございました。
- とても楽しかったです。
- 10 年後まちがいい方へ変わると良いなと思います。

よさのみらい会議 提案書

私たちが考えるまちのありたい姿

発行日：令和 8 年 1 月 20 日

発行：よさのみらい会議参加者一同

編集協力：一般社団法人構想日本

〒102-0093

東京都千代田区平河町 2-9-2 エスパリエ平河町 3F

TEL:03-5275-5607

<https://www.kosonippon.org/>

構想日本